



三 ゆりわか大臣 ゆりわかだいじん

図書館所蔵、貴重書二二〇号。写本一帙二冊。横長四ツ目綴線装本。打雲表紙。鳥の子題簽に肉筆で「ゆりわか大臣上」「ゆりわか大臣下」とある。本文と同筆。縦一六・九糎、横二四・一糎。封面は布目。上巻笹紋様・下巻秋草紋様。本文首葉に「營」の印。上巻二十二丁・下巻十七丁、全三十九丁。料紙は斐紙。奈良絵本。

※

※

『百合若大臣』は十六世紀に完成したといわれる中世芸能、幸若舞曲の一つである。坪内逍遙がこれをホメロスの『オデュッセイア』の翻訳であると説き、その後の研究に大きな影響を与えた。諸本により詞章や内容に多少異同があるが、概して以下のような説話である。

長谷観音の申し子である百合若は、蒙古討伐の神託を受けこれを撃滅するが、凱旋の途中家臣の逆心により玄海が島に置き去られる。百合若の北の方が宇佐八幡に祈願していると、ついに老岐の釣人により帰国を果たす。新年の弓初めで百合若しか引くことのできない宇佐八幡の鉄の強弓を引きしぼり、家臣に復讐を遂げる。その後宇佐の宮を修造し、帰国を助けた鷹の霊を弔い、神護寺を建て、再び日本の將軍となる。

『百合若大臣』が宇佐八幡と深く関係していることは、この内容からも明白である。百合若が蒙古を討伐するという要素も八幡信仰の伏敵思想と関

係しており、全国に分布する百合若説話は、宇佐八幡の唱導文学としての性質を持っていたといえる。

冒頭部分では、国常立尊より始まる諸神の生成と、「（根本地）こんほんちの神こそ、ほとけとならせ給ひつゝ、（衆生）しゆじやうさいどし給ふなり」という神本仏迹の思想が説かれている。また蒙古襲来を、日本国開闢の始め天照大神と契約した魔王の仕業であると、中世に流布した仏教側の伊勢神宮縁起説が窺える。さらに、三種の神器の言及と神国思想が見え、「中世日本紀」の言説と結びついた一つの神話を形成していると考えられる。

（幸田優里）

【所収本】

荒木繁・池田広司・山本吉左右『幸若舞 一』（平凡社東洋文庫）所収、昭和五十四年（一九七九）

【参考文献】

阿部泰郎「八幡縁起と中世日本紀」『現代思想』二十卷四号、平成四年（一九九二）
前田叔『百合若説話の世界』弦書房、平成十五年（二〇〇三）